

ソーシャルワーク実習に向けたOSCE（客観的臨床能力試験）の有効性と評価チェックリストの適性の検証

梅沢佳裕 宮澤江梨子 渡邊隆文 田村正人

健康科学大学 健康科学部 人間コミュニケーション学科

Verification of the validity of the OSCE (Objective Structured Clinical Examination) and the suitability of the evaluation checklist for practicum in social work

UMEZAWA Yoshihiro, MIYAZAWA Eriko, WATANABE Takafumi, TAMURA Masato

要 旨

実習指導教員による検討を経て開発済みのOSCEの評価チェックリストについて、評価結果並びに学生へのアンケート調査をもとに、OSCEの有効性と評価チェックリストの適性の検証を行うことを目的とした。本学において社会福祉士または精神保健福祉士資格取得を目指し、ソーシャルワーク演習を履修する2年生を対象に、評価結果並びにアンケート結果の分析を行った。その結果、評価チェックリストの分析からは、状況を読み取り臨機応変な対応が求められる項目において達成率が低くなることが明らかとなった。アンケート結果からは、OSCEで自分の課題や弱点が明確になったため、「役立った」「有効だった」とする意見が多数を占めた。学生にとってOSCEはこれまで学んできた講義科目や演習科目についての学習到達度を測り、自らの課題を明確にするための指標として有効であると考えられるが、評価チェックリストの適性については、今後も配点等の再検討が必要である。

キーワード：OSCE、ソーシャルワーク実習、実習前評価システム、客観的臨床能力試験

I. はじめに

1. 研究の背景

我が国の社会福祉士・精神保健福祉士養成教育は、臨床現場に求められている多様化した相談援助業務の拡大とソーシャルワーカーとしての高い専門性を身につけるべく、次世代に繋げる教育の在り方が問われている。2019年6月に厚生労働省より「社会福祉士・精神保健福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」が発表され、「社会福祉士養成課程のカリキュラム（案）」、「精神保健福祉士養成課程のカリキュラム（案）」の発出によって、具体的なカリキュラム見直しの検

討が開始された。

ソーシャルワーク実習における実習施設側の実習生の受入れについて、巻¹⁾は「臨床参加型実習は、実習生が利用者と直接的・間接的に接することが求められる。しかし、この求めは実習受入施設・機関や利用者からすると、大きな不利益をもたらす可能性も否定できないプログラムでもある」と言及している。また、渡辺²⁾も同様に「実習を行う場合は実際に利用者や住民と触れることから『見極め』を曖昧にして実習に送り出すことは実習生本人へのリスクであるばかりではなく、利用者や実習先へのリスク」と指摘している。

これらの懸念されるべき実習受入れ状況に対して、第一義的に取り組むべきは、ソーシャルワーク実習における実習前評価としての客観的臨床能力試験（以下、OSCE：Objective Structured Clinical Examination という。）を導入し、ソーシャルワーク実習に臨む実習生として一定程度の実践力が身につけているか否かの評価の必要性が出てきている³⁾。OSCEは、近年の臨床医療専門職養成教育において、卒業時の到達目標を含む「モデル・コア・カリキュラム」の設定や知識試験（CBT:Computer Based Testing）等とともに導入が進められており、医学・歯学教育をはじめ、薬剤師・理学療法士・作業療法士・看護師などの養成において試行・実施されている⁴⁾。

ソーシャルワーク実習に臨む実習生としての実践力を評価するには、定期の筆記試験やレポートによる履修課題の到達度評価だけではなく、実際の臨床場面を想定した実践的なロールプレイによる到達度評価についても実施することが求められてくる。大滝⁵⁾は、OSCEの特性について『技能』を評価するには、「OSCEは筆記試験よりもはるかに妥当性が高い」と言及している。この点からすると、筆記試験による知識の定着度の評価に加えて、実際にクライアントと対面する場面を想定した実践力を図るためのOSCEの導入が、実習の事前評価として必要であると考えられる。

また、OSCEの導入は、評価者である教員の立場からだけではなく、学生自身にとってもソーシャルワーク実習の事前学習における課題の明確化が期待できるとされる⁶⁾。さらに、学生が自身の能力や不得意な科目等の弱みに改めて気づいた

り自己を振り返り可視化したりするだけでなく、ソーシャルワーク実習に向けた「勉強のきっかけ」になるとも考えられている⁷⁾。これらの先行研究の知見をもとに、健康科学大学健康科学部人間コミュニケーション学科（以下、本学とする。）において、ソーシャルワーク実習の事前評価としてOSCEの試行的導入に向けた評価チェックリストの開発を行うこととした。

2. ソーシャルワーク実習に向けてのOSCE評価チェックリストの開発

これまでOSCEの開発は、北海道医療大学において先行して進められてきた。北海道医療大学が開発した「実習前評価システムOSCE評価チェックリスト」¹⁾は、インテーク面接とアセスメント報告、実習日誌記載・提出の3場面についての評価が可能となっている。インテーク面接の評価チェックリストは、臨床を想定した面接場面の設定として、ロールプレイに基づく17のチェック項目とその他のチェックリストとして5つのチェック項目が配されている。また、クライアント役の評価項目として6つの評価項目が配されているのが特徴である。本学では、現在に至るまで社会福祉士養成に係る相談援助実習（旧カリキュラム）の実習前評価について、定期試験やレポート課題等による評価に拠り所をおいてきた。しかし、社会福祉士・精神保健福祉士の新カリキュラムへの見直しにより、課題となっていたOSCEの導入に関して、本学におけるソーシャルワーク演習（2年生履修科目）の科目終了試験として位置づけることが決まったほか、ソーシャルワーク実

〔表1〕OSCE評価チェックリストの開発スケジュール

2022年	実施内容
3月	OSCEの客観的指標による評価の検討、尺度開発の指針について
4～5月	OSCE評価チェックリストの開発開始
6～7月中旬	OSCE評価チェックリストの検討 OSCE評価チェックリスト案のブラッシュアップ
7月下旬～8月初旬	OSCE評価チェックリスト案のプレテストの実施
8月初旬	OSCE評価チェックリスト案の不具合か所の再検討

習指導に携わる教員の志向の高まりもあり、今回 OSCE 評価チェックリストの開発を行うに至った。評価チェックリストの開発にあたっては、北海道医療大学の「実習前評価システム OSCE 評価チェックリスト」¹⁾ を出発点とし、本学の建学精神並びにディプロマポリシーを教育の到達目標としつつ、社会福祉士及び精神保健福祉士になりゆく実習生としての到達点、つまり一定の要件を備えていることを教員・学生間で客観的に確認し合えるように、新たに評価項目の改編を行うこととした。

本学における OSCE 評価チェックリスト開発のスケジュールと進め方について一覧として下記に示す〔表1〕。

OSCE の「評価項目」の改編は、まず【1. 面接基本姿勢】、【2. コミュニケーション技術】、【3. 試験のミッション】で構成し、それぞれ一項目ずつ丁寧に吟味しながら修正を加えた。評価の際の指標となるループリックの作成にあたっては、学生の評価を担当する教員によって判断に大きな差異が出ないように考慮しつつ、評価基準となる文面を記した。「評価段階」は「○・×」とし、「○」

〔表2〕 ソーシャルワーク実習に向けた OSCE 評価チェックリスト

OSCE 評価チェックリスト (学生名:)			
【1. 面接基本姿勢】			○=4点
チェック項目			評価
1	服装	○	×
2	身だしなみ	○	×
3	あいさつ・自己紹介	○	×
4	適切な言葉づかい	○	×
5	実習生としての立場の理解	○	×
小計(20点満点)		4点×	問= 点
【2. コミュニケーション技術】			○=5点
チェック項目			評価
6	CLのとの対話に合った視線	○	×
7	沈黙の対応への的確さ	○	×
8	CLの発言への傾聴姿勢	○	×
9	相談環境への配慮	○	×
10	CLの状況の理解と配慮	○	×
小計(25点満点)		5点×	問= 点
【3. 試験のミッション】			○=5点
チェック項目			評価
11	CLの感情に合わせた態度	○	×
12	CLへの共感的な接し方	○	×
13	必要な情報収集	○	×
小計(15点満点)		5点×	問= 点
合計(60点満点)			
【評価段階】			
○(合格): 実習生として適切な対応方法を身につけている または、今後の学習により、実習までには身につけられる			
×(不合格): 実習生としての基本知識・技術が身につけていない または、対応しなければならないことをしていない			

= 適切・的確である (実習生として適切な対応方法を身につけている), 「×」= 適切・的確でない (対応方法が的外れ, 対応しなければならないことをしていない), の2件法とした。また, OSCE のインターク面接の配点としては60点を満点とした。ループリックの記載を分かりやすい表現に変更するなどブラッシュアップを図り, 本学科において社会福祉士または精神保健福祉士の資格取得を目指す実習未経験の3年生9名に任意で模擬面接を実施し, 本学の社会福祉士及び精神保健福祉士の実習指導教員による丁寧な検討会議を経てブラッシュアップを重ね, 「OSCE 評価チェックリスト」の完成に至った〔表2〕。

そこで本研究は, 実習指導教員による検討を経て開発済みの OSCE の評価チェックリストについて, 評価結果並びに学生へのアンケート調査をもとに, OSCE の有効性と評価チェックリストの適性の検証を行うことを目的とした。

II. 方法

1. 研究方法

調査対象者は, 本学において社会福祉士または精神保健福祉士の資格取得を目指し, ソーシャルワーク演習を履修する2年生とした。アンケート調査は, OSCE を終了し移動した控室にて実施した。本調査への参加・不参加は任意とし, 倫理的配慮についての説明を行ったうえで, 同意が得られた学生のみアンケートへの回答並びに試験終了後の評価結果を回収した。

2. 調査内容

評価結果並びにアンケート調査は, ソーシャルワーク演習による知識・技術の定着を量るため OSCE を用いた面接の試験方法と評価チェックリストの適性について回答を求めた。アンケート内容については先行研究^{1),7),8)} を参考とし, ① OSCE に向けて授業外での準備への取組み, ② OSCE の目的の理解, ③ OSCE で明らかとなった自分の課題, などについて4件法と自由記述を組み合わせ回答を求めることとした〔表3〕。アンケート調査は, 2022年11月1日の OSCE の終了後に実施した。

3. 分析方法

評価結果及びアンケートの4件法への回答については単純集計とし、自由記述については、全体像や概念を把握するのに有効なKJ法^{9),10)}を用いた。回答されたアンケートの自由記述を類似しているラベルごとに集めラベル化し、作成されたラベルを使用して、意味の類似性からグループ化を行い、表札を付ける手順で分析を行った。

4. 倫理的配慮

調査の実施にあたっては、調査の目的、分析方法、試験結果の取り扱い方、匿名性の保護について書面及び口頭で説明を行い、同意を得られた学生のみ、調査協力を依頼した。なお、調査への参加・不参加は自由意思に委ねられており、調査への協力が得られないとしても個人の成績、その他評価には何ら不利益が生じないことについても説明を行った。本調査で得られた情報及びデータは、不用意に漏洩することがないように決められた保管場所に鍵をかけ厳重に保管することとした。なお本調査に際しては、健康科学大学倫理審査の承認を得たうえで実施した(承認番号:R4-009号)。

Ⅲ. 結果

ソーシャルワーク演習の履修者15名全員が調査への協力に同意し、15名(男性5名,女性10名)から評価結果の提供及びアンケートの回答が得られた。

1. 評価結果

OSCEの評価結果は〔表4〕の通りである。合計の平均点は60点満点中44.27点であった。3つの評価領域ごとの平均点数(達成率)は、【1. 面接基本姿勢】が20点満点中18.93点(94.7%)、【2. コミュニケーション技術】が25点満点中16.67点(66.7%)、【3. 試験のミッション】が15点満点中8.67点(57.8%)であった。

チェック項目ごとの合格者数と達成率については、【1. 面接基本姿勢】において全員合格の項目が多く、「CLの状況の理解と配慮」が合格者3名(20.0%)と最も少ない結果となった。次いで、「相談環境への配慮」「CLへの共感的な接し方」「必要な情報収集」が7名(46.7%)と同率で合格者が少なかった。

2. アンケート結果

調査対象者15名中15名がアンケートを提出し、回収率及び有効回答率は100%であった。項目ごとの回答の分析結果については、以下の通り

〔表3〕OSCEについてのアンケート用紙

〔表4〕OSCEチェック項目の集計

	合格(人)	達成率(%)	mean±SD
合計(60点満点)			44.27±10.76
1. 面接基本姿勢(20点満点)		94.7	18.93±1.83
服装	15	100	
身だしなみ	15	100	
あいさつ・自己紹介	15	100	
適切な言葉づかい	15	100	
実習生としての立場の理解	11	73.3	
2. コミュニケーション技術(25点満点)		66.7	16.67±5.88
沈黙の対応への的確さ	15	100	
CLの発言への傾聴姿勢	11	73.3	
相談環境への配慮	7	46.7	
CLの状況の理解と配慮	3	20.0	
3. 試験のミッション(15点満点)		57.8	8.67±5.50
CLの感情に合わせた態度	12	80.0	
CLへの共感的な接し方	7	46.7	
必要な情報収集	7	46.7	

〔表5〕 OSCEに関する自由記述の一覧

問1：OSCEに向けての準備として授業以外に取り組んだこと（自由記述）	
<ul style="list-style-type: none"> ・友人や先輩と一緒に練習した(11) ・服装について友だちと話し合った(6) ・自分でシミュレーションを重ねた(4) ・教員にコミュニケーションについて聞きに行った(2) 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書を読んで面接の目的や意義を考えてみた(2) ・授業の復習を行った(2) ・先輩にアドバイスを受けた(2)
問4：OSCEを受けたことは、自身の学習到達度等の確認に役立ったか（自由記述）	
①非常に役立った（14名）、②まあ役立った（1名）	
<ul style="list-style-type: none"> ・できていること、できていないことなどの達成度を確認することができた(10) ・自分では気づけなかったことに気づくことができた(4) ・実践に近い場面での面接を通して自分のウイークポイントを指摘してもらえた(4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・OSCEを受けたことで、話して良い事とダメなことを知ることができた(1) ・OSCEを通して実習の雰囲気を知ることができた(1) ・座学以外の知識を身につけられるから(1) ・初対面の人に話をするのは信頼関係や態度などが重要になってくることが分かった(1)
問6：OSCEの形式でスキルを測られることは有効だと思ったか（自由記述）	
①非常に有効だと思う（13名）、②まあ有効だと思う（2名）	
<ul style="list-style-type: none"> ・実習に向けて実践的なことをすることで、自分の到達度を知ることができ本番に生かせるから(4) ・自分自身では気づかない部分を指摘してもらうことができるため有効だと思う(3) ・実習生としてのスキルがどのくらい有るのかを測ることができるから(3) ・自分では気づけていない長所・短所を見つけることができた(3) ・有資格者（教員）にチェックしてもらえるのは有難いと思う(2) 	<ul style="list-style-type: none"> ・OSCEは自分の素の状態が発揮されるから、自己分析にもなる(1) ・試験を通してクライアントの感情など、読み取りながら行うのは有効であると思った(1) ・緊張感などもあるので、基準や問いなどの配慮などをしてもらえると良いと思った(1) ・終わった後に直ぐにフィードバックしてくれるので、自分のスキルがどの程度分かるから(1)
問8：OSCEで、自分の弱点（課題）が明らかになったか（自由記述）	
①明らかになった（15名）	
<ul style="list-style-type: none"> ・沈黙になってしまうと、焦って何でもいから話そうとしてしまうこと(11) ・質問攻めで尋問のような形になってしまった(4) ・クライアントとのコミュニケーションが想像以上に難しいことが分かった(4) ・言葉選びや言葉遣いなど(3) ・固定概念に囚われすぎてしまう(2) ・緊張して表情や姿勢が固くなってしまうこと(2) ・クライアントからの約束事に勝手に同意しないようにすること(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・奥手になってしまい、あまり悩みについて聞き出すことができなかった(1) ・相手を見過ぎてしまうことで、相手に負荷を書けてしまう(1) ・相手に自分を知らせてもらおうとできていなかった(1) ・自信の無さが声や表情に出てしまった(1) ・相手の気持ちを尊重できていなかった(1) ・感情の反射がとっさにできないということに気づくことができた(1)
問10：OSCE（客観的臨床能力試験）の評価内容にご自身としては納得できたか（自由記述）	
①納得している（14名）、②少し納得している（1名）	
<ul style="list-style-type: none"> ・自分が苦手と感じていることを指摘されたため評価内容にはとても納得できた（4） ・良かった点、悪かった点をしっかりと指摘してもらえたから（3） ・（自分では）もっと低いと思っていたから（3） ・会話の中で自分が迷ったところを指摘されたから(2) ・フィードバックを聞いて、その通りだと思った(1) ・認識しているとおりの出来だと思ったから(1) ・留意していたことをできていなかったことが分かったため(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・まだまだ自分にはやれると思ったから(1) ・この状態で（実習）本番を迎えるには不十分な点が多くあるから(1) ・質問をしても話してくれなかった時の対応方がとても難しかった(1) ・最初の方は固かったし、つまるところも多かったので、満点ではなかった(1) ・OSCEを通して自分の課題が明確になったから(1)

である。なお、自由記述は〔表5〕にまとめた。

1) OSCEに向けての準備として授業以外に取り組んだこと (自由記述)

OSCEに向けての準備では、「友人や先輩と一緒に練習した」との回答が最も多かった。

2) OSCEの目的について理解できたか

「よく理解できた」が12名 (80.0%)、「まあ理解できた」が3名 (20.0%)であった。

3) OSCEを受けたことは、自身の学習到達度等の確認に役立ったか

「非常に役立った」が14名 (93.3%)、「まあ役立った」が1名 (6.7%)であった。

4) 「問3」でそのように回答したのはなぜか (自由記述)

OSCEを受けたことが、自身の学習到達度等の確認に「非常に役立った」「まあ役立った」と回答した理由としては、「できていることと、できていないことなどの達成度を確認することができた」との回答が最も多かった。

5) OSCEの形式でスキルを測られることは有効だと思ったか

「非常に有効だと思う」が12名 (80.0%)、「まあ有効だと思う」が3名 (20.0%)であった。

6) 「問5」でそのように回答したのはなぜか (自由記述)

OSCEの形式でスキルを測られることは「非常に有効だと思った」「まあ有効だ」と回答した理由としては、「実習に向けて実践的なことをすることで、自分の到達度を知ることができ本番に生かせるから」や「自分自身では気づかない部分を指摘してもらうことができるため有効だと思う」などの回答が多かった。

7) OSCEで自分の弱点 (課題) が明らかになったか

「明らかになった」が15名 (100.0%)であった。

8) 「問7」でそのように回答したのはなぜか (自由記述)

OSCEで、自分の弱点 (課題) が明らかになったと回答した理由としては、「沈黙になってしまうと、焦って何でもいから話そうとしてしまうこと」との回答が最も多かった。

9) OSCEの評価内容にご自身としては納得できたか

「納得している」が14名 (93.3%)、「少し納得している」が1名 (6.7%)であった。

10) 「問9」でそのように回答したのはなぜか (自由記述)

OSCEの評価内容に「納得している」「少し納得している」と回答した理由としては、「自分が苦手と感じていることを指摘されたため評価内容にはとても納得できた」「良かった点、悪かった点をしっかりと指摘してもらえたから」などの回答が多かった。

IV. 考察

1. 評価結果から

集計の結果、【1. 面接基本姿勢】については、学生間で差が出にくく、【2. コミュニケーション技術】及び【3. 試験のミッション】において、評価に差が表れることが明らかとなった。特に、「CLの状況の理解と配慮」「CLの感情に合わせた態度」「CLへの共感的な接し方」「必要な情報収集」については、試験問題 (事例内容) により対応方法が異なり、そこに適切に対応できているのかをチェックする項目となっているため、試験時間内で状況を理解し、臨機応変に対応を行うことに苦慮した学生が多かったものと考えられる。反対に、「服装」や「あいさつ・自己紹介」など試験問題の内容に影響を受けない項目については、全員が実習生として適切な対応をとり合格となった。これらの項目については、現在の評価基準では他のチェック項目に比べ、容易に点数が取れることが明らかとなったため、配点が適切であったか、再度検討を行う必要があると考えられる。

2. アンケート結果から

「OSCEの目的について理解できたか」の回答からは、「よく理解できた」と「まあ理解できた」が全体を占めており、学生が目的を理解したうえで、OSCEに臨んでいたことが分かった。OSCEの目的については、ソーシャルワーク演習の第1回のガイダンスで、「ソーシャルワーク実習にお

いて事前にその定着が求められる基礎知識だけではなく、実際の福祉現場でのクライアントとの対面による実習を展開していくうえで、必要となる臨床能力の定着を確認するための面接試験」との説明がなされている。

「OSCEを受けたことは、自身の学習到達度等の確認に役立ったか」についての回答からは、「非常に役立った」と「まあ役立った」が全体を占め、学習到達度の確認やこれから取り組むソーシャルワーク実習に向けての課題発見などに大いに役立ったことが分かった。また、「OSCEの形式でスキルを測られることは有効だと思ったか」についての回答からは、OSCEを行うことの有効性も伺えた。今回のOSCEが実習場面に近い事例を設けたことで、まだ実習経験がない今回の学生にとっては、実習の臨場感を体験でき、机上の授業では気づくことができない学びや課題に直面化できたのではないかと考える。ソーシャルワーク演習のなかで取り組む基本応答技法のロールプレイは学生同士で行うことが多いため、どうしてもクライアントの障害特性などを再現することが困難であり、クライアントの感情への反射や状況への反射などの実践的な習熟度を各自が測ることが難しいと考えられる。OSCEは実習前の客観的臨床能力を測り、臨床での実習の意識づけ・動機づけにも繋がったのではないかと推察する。

さらに、「OSCEで自分の弱点（課題）が明らかになったか」については、すべての学生が自分の弱点が明らかになったと回答された。自由記述には、「沈黙になると焦ってしまい何か話そうとしてしまう」「質問攻めで尋問のような形になってしまう」「クライアントとのコミュニケーションが想像以上に難しいことが分かった」など、学生同士の気軽な“おしゃべり”のような日常会話と、目的を有したソーシャルワーカーとしてのコミュニケーションの違いに不慣れなため戸惑ったのではないかと想像できた。普段の会話とソーシャルワークにおけるコミュニケーションの違いを体験できたこともOSCEが役立ったのではないかとと思われる。

V. 結論

本研究は、ソーシャルワーク実習に向けて初めて実施したOSCEにおける本チェックリストの適性と有効性を検証する第一段階として、試験結果及びアンケート結果から本学学生への有効性と評価チェックリストの適性について検証を行った。

学生はソーシャルワーク演習の授業において、評価チェック項目を意識して臨み、試験に向けて授業外でも準備を行っていたことが明らかとなった。評価結果から「服装」や「あいさつ・自己紹介」など学生間で意見交換を行い事前に準備することで容易に合格できる項目がある一方で、事例ごとに異なるクライアントの状況に合わせ臨機応変に対処する必要がある項目は、学生自身の練習不足や経験不足などを挙げることもできるが、誰かの真似ではなく自己覚知を通して学生自身に合った関わり方を見つけられるかが問われる結果となった。今後は、これらの要因を踏まえた授業による教育効果についての検討が必要である。

アンケート結果ではOSCEに対し肯定的な評価が多く、学生にとってOSCEがこれまで学んできた講義科目や演習科目についての学習到達度を測り、自らの課題を明確にするための指標として有効なものになったと考えられる。

以上のことから、OSCEの本学学生への有効性はあったと考えられるが、評価チェックリストの適性については、今後も検討が必要である。また、調査対象が15名と少ないことから、この結果を一般化することには限界があり、来年度以降も継続して検証を重ねる必要があると考える。

VI. 謝辞

本研究にあたって、調査にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

VII. 文献

- 1) 巻康弘・川勾亜紀奈ほか「相談援助実習におけるOSCE（客観的臨床能力試験）の開発：実施結果と学生アンケート調査から」北海道医療大学看護福祉学部紀要(21), 1-11, 2014.
- 2) 渡辺央「相談援助実習の実習前評価についての実態」

- 研究紀要 (20), 165-172, 2013.
- 3) 近藤尚也・巻康弘ほか「相談援助実習におけるOSCE結果の活用実態：実習指導者へのアンケートから」北海道医療大学看護福祉学部学会誌 12 (1), 99-103, 2016.
 - 4) 長谷川真理子「福祉専門職養成教育における実習前評価システムとしてのOSCE開発に関する予備的考察：臨床医療領域および福祉領域におけるOSCEの動向から」青森県立保健大学雑誌 15, 39-46, 2014.
 - 5) 大滝純司「OSCEの理論と実際」篠原出版新社, 2007.
 - 6) 川勾亜紀奈, 巻康弘ほか「相談援助実習に向けた実習前評価システムとしてのOSCE（客観的臨床能力試験）の企画・運営：事前準備の内容とその変遷を中心に」北海道医療大学看護福祉学部紀要 (23), 79-86, 2016.
 - 7) 阿部好恵「短期大学における実習前評価の検討：「実習前評価システム（短期大学版）」の試行的実施から」帯広大谷短期大学紀要 (53), 1-9, 2016.
 - 8) 巻康弘, 近藤尚也ほか「相談援助実習におけるOSCE（客観的臨床能力試験）試験項目の評価—学生及び評価者の調査結果から—」北海道医療大学看護福祉学部紀要 (23), 33-41, 2016.
 - 9) 川喜田二郎『発想法—創造性開発のために』中央公論新社：1967.
 - 10) 川喜田二郎『続・発想法—KJ法の展開と応用』中央公論新社：1970.